

### 第3節 学寮・厚生福利

マレーシアの留学生チュア・スイ・リンの復学問題がおこったのは昭和40年である。

昭和43年から44年にわたる全国の大学を巻きこんだいわゆる大学紛争の嵐に千葉大学も例外ではなかった。

西千葉地区においては、工業短期大学部における自衛官通入学問題、学長選挙問題が、またこれと並行した形で亥鼻地区においては医学部の登録医制度をめぐる同教授会と医学部自治会との葛藤が昭和44年12月まで続いた。

昭和49年、公害問題をとりあげた運動が2月から4月にかけて続けられた。また、同年5月、大学管理法案に反対する集会在、学内外で行われた。それと並行して、M P I（モーズレイ性格検査）一学生相談に反対する運動がとりあげられ、M P I粉砕、反公害、部落解放、防衛医大解体の運動が相互に関連するものとして学生運動のテーマとなった。

その後、昭和50年から翌51年にかけて国立大学学費値上げ阻止に向けての運動があった。

以上、千葉大学の学生運動の骨子をのべるにとどめ、詳細については、総編の記述に譲る。

## 第3節 学寮・厚生福利

### 1. 学 寮

#### (1) 新制大学発足当初の学寮

旧制諸学校が保有していた学寮を引き継いだもので、その多くは旧軍隊の木造兵舎を転用した老朽施設であった。昭和26年4月1日千葉大学学寮規程が制定され、学寮は各学部置くことができる、学寮の主管は当該学部長があたるとし、学部長の委嘱した顧問が学寮生活に対し随時適切な助言をすることとなっていた（昭和39.6.27現行学寮規程の制定に伴い廃止）。当時の学寮は次のとおりである。

教育学部	猪 丘 寮	男 子	110名
教育学部分校	拓 心 寮	男 子	192名
同	上 睦 寮	女 子	114名

医 学 部 研 水 寮	男 子	18名
同 上 人 生 希 望 寮	男 子	47名
同 上 第 一 学 生 寮	男 子	25名
工 学 部 松 芸 寮	男 子	68名
園 芸 学 部 浩 気 寮	男 子	80名

昭和25年当時、寮生が負担する経費は学寮により多少の差はあったが、月額にして、寄宿料100円、寮費（共同費用に充てる）40円～100円、食費1,100円～1,200円程度、他に入寮費200円を入寮の際納入した。



人生希望寮外景

(2) 拓心寮の焼失と啓心寮の開寮

昭和27年3月26日拓心寮を焼失、この代替として教育学部分校職業科教育棟のうち、10教室3研究室を転用して36名収容の寮とし啓心寮と命名、同年4月開寮した。

(3) 文理学部男子寮開寮

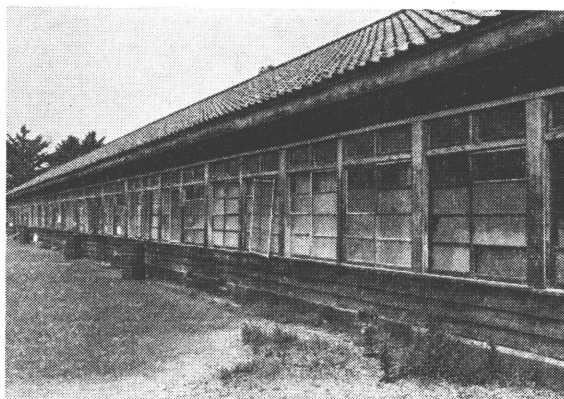
文理学部北方500mに位置した一般教養体育実技の卓球、ダンス場（旧陸軍防空学校幹部候補生生徒集会所及び酒保・W2 3,010.6m<sup>2</sup>）の2階を3名部屋16.5m<sup>2</sup>10室、2名部屋9.9m<sup>2</sup>1室に改修、32名収容の学寮として昭和27年11月1日小池敬事文理学部長、柏木嵩学生部長、吉川孔敏厚生課長、山崎寛一文理学部事務長等関係者出席のもとに開寮式を挙行、北寮と命名した。食事は構内の学生食堂を利用した。なお、拓心寮焼失で罹災した文理学部学生の住対策のため北寮開寮までの応急措置として、同年4月ごろ同キャンパス内の附属図書館書庫（旧陸軍防空学校照空及び予習講堂、R I 127.99m<sup>2</sup>）に24名を収容、短期間ではあるが蔦寮（建物外壁に蔦が張っていた）と称し利用された。北寮は昭和40年4月稲毛寮A棟完成に伴い廃寮となる。

(4) 無 名 寮

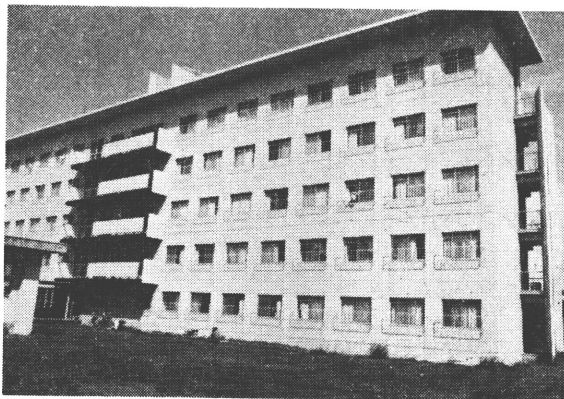
一般教養課程学生の住居問題は前々から深刻なものであったが、当時の吉川厚生課長、伊藤信一厚生係長の努力により昭和30年4月念願の男子寮を開寮、無名寮と命名した。

### 第3節 学寮・厚生福利

無名寮は、旧陸軍習志野学校車廠2棟のうち1棟600m<sup>2</sup>を昭和29、30両年度にわたり4,096,550円を要して改造、3名部屋16.5m<sup>2</sup>16室、2名部屋13.5m<sup>2</sup>1室計50名を収容同30年に開寮、残り1棟609m<sup>2</sup>について年次計画で改修昭和34年に53名収容で開寮、前者を第一無名寮、後者を第二無名寮と称した。食事については当初隣接の人生希望寮から主食（1食15円）だけを受け、副食は市販の物を各自の好みで1食20～40円で購入していた。昭和34年4月第二無名寮開寮を機に財団法人学校福祉協会（以下「福祉協会」という）に食堂業務を委託、同36年4月から寮生の自主運営、同44年4月から大学の管理するところとなる。この間、昭和35年9月19



旧無名寮外景



現在の新無名寮外景

日に53名（中3名疑似）の集団赤痢、同48年9月11日には27名の食中毒が発生、施設の老朽化が問題となった。同51年9月千葉市小中台町に新寮が完成したことにより廃寮となったが、同年11月30日夜半不審火により1棟を焼失した。

#### (5) 留学生寮

昭和35年4月留学生課程が新設、翌年6月留学生寮A棟が開設され学生部が所管していたが、同39年4月留学生部へ移管、同46年4月留学生部の廃止に伴い再び学生部が所管する。同48年度からは東京地区国立大学在籍の外国人留学生も受け入れることになった。

#### (6) 利用状況

以上のとおり設備、収容能力ともに貧弱なもので、特に女子寮は陸寮だけで入寮は困難であった。昭和32年には、男子寮である人生希望寮に7名の女子学生が強行入寮

表17-3 学 寮 の 現 況

所 属	寮 名		入 寮 対 象 者	収容定員	施 設 の 概 況				所 在 地	概 要
					構 造	面積 <sub>m<sup>2</sup></sub>	建築年月	1室の 収容人員		
学 生 部	無 名 寮		教養課程 男 子	名 100	R 5	381 1,800	昭和 51.7	1~2	千葉市小中台町824	猪丘寮代替としてB棟完成に伴い、工学部所管のA棟を統合して学生部所管となる。
	稲毛寮	A 棟	専門課程	88	R 4	1,654	40.3	2		
		B 棟	男 子	120	R 4	3,439	41.3	2		
	陸 寮		全学女子	118	R 4	1,049 1,890	39.3	2		
医 学 部	医学部学生 寄 宿 舎		医学部 専門課程 男 子	60	P C 3	359 1,093	54.2	1	千葉市亥鼻1-8-1	第1学生寮(20名収容) 人生希望寮(54名収容) 共に木造老朽寮のため建替えたもの。
園 芸 学 部	浩 気 寮		園芸学部 男・女	男 84 女 26	R 3	892 2,019	46.5	男 4 女 2	松戸市松戸648	
学 生 部	留 学 寮	A 棟	外 国 人	男 139	R 3	1,259 2,519	36.6	1	千葉市小中台町824	東京地区国立大学の外国人 学生も含む。
		B 棟	留 学 生	女 30	R 3	629	38.3	1		
					一部R 2	1,656				

### 第3節 学寮・厚生福利

するというハブニングもあったが、本学における統合整備計画の進展に伴い、学寮も医学部及び園芸学部所管を除き稲毛地区に統合、これに即応した学寮規程が昭和39年6月27日制定され、同年5月14日制定の厚生補導委員会規程で学寮部会が置かれ、学寮問題に関する事項を審議する全学組織が確立した。現在置かれている学寮は表17-3のとおりである。

稲毛寮、陸寮の食堂運営については、昭和39年4月陸寮が、同40年4月稲毛寮A棟がそれぞれ閉寮した時から福祉協会に委託していたが、稲毛寮B棟閉寮の同41年4月から、稲毛寮厨房において陸寮分と一括調理方式をとり陸寮食堂に運搬していた。その後寮生側から福祉協会排斥の動きがあがる一方、福祉協会も赤字経営のため辞退の申出があり、同49年3月24日をもって食堂を閉鎖した。この問題を打開するため学寮部会正・副部会長、学生部長、同次長、厚生課長、厚生係長及び稲毛、陸両寮の寮長等役員を交えて寮食堂運営協議会をもち、同年11月1日大学管理のもとに稲毛寮において従来の両寮一括方式で再開した。

## 2. 厚生施設

教務厚生部が文理学部構内に移転した昭和25年当時の厚生施設は学生ホールのみで、この一隅に書籍販売店（現北田書店）、文房具店（現大和屋）、万年筆店、パン牛乳等軽食販売店を置き各業者に業務委託をしていた。同27年6月新たに理髪業者（調髪60円、丸刈50円等市価の半額）を置いた。同28年文理学部1、2号館南側の既設建物で業者委託による食堂開設したが、同地区留守業務部の移転、丸善石油の進出等に関連して厚生施設の移転も再三にわたって行われた。昭和32年10月から福祉協会に食堂経営を委託した。昭和38年8月西千葉地区に移転統合したがメイン食堂は旧東大施設の教職員食堂で福祉協会が経営、第2食堂（めん類）は業者委託で経営されたが、運営については文部省共済組合千葉大学支部が当たった。昭和41年に現在の厚生施設（R2 1,612m<sup>2</sup>）が完成し、1階食堂ホール（608席）は厚生課の所管となった。

現在の厚生施設には福祉協会による食堂のほか、軽食品等物品販売所、文房具販売所、書籍販売所、理容室があり、従来どおりの形式で運営されている。昭和49年には西千葉地区学生食堂（R2 1,199m<sup>2</sup>）が新築され厚生課が所管しているが、千葉大学生活協同組合（昭和40.7.28設立学校認可。昭和44.3.12千葉県知事認可）による食堂（384席）、喫茶部（60席）、書籍、文具、食品等の販売所がある。

## 3. 奨 学 ・ 援 護

## (1) 奨 学 生 制 度

新制大学発足当初の奨学金制度は日本育英会のみで、一般奨学生、教育奨学生、特別奨学生の3種類があった。一般奨学生は貸与月額1,800円、採用期間は一般教養の2か年、専門課程進学時は再申請する。教育奨学生は甲種500円、乙種1,800円の2種類、貸与期間は第2年を修了するまで、第3年以上は一般奨学生として再申請する。特別奨学生は月額3,000円、特に学術研究に適する優秀な者が内職をしないで修学に専念できるよう一般奨学生より高額を貸与するもので、原則として2年次以上の学生を対象とした（当時の自宅外通学大学生生活費月額3,857円）。以後奨学生種類の改廃や貸与額の改訂があり、昭和53年度には学部学生の一般貸与15,000円、特別貸与17,000円（自宅）、23,000円（自宅外）、大学院修士43,000円、博士54,000円となっている。奨学金交付方法は、当初は窓口で職員が担当していた。昭和28年からは銀行員が出張して交付してきたが、昭和53年4月から日本育英会の奨学事務が機械処理に改善されて銀行口座振込方式となった。昭和28年頃から地方自治体等の奨学制度も生れたが、現在は民間団体も合わせて26団体、月額5,000円～25,000円となっている。

## (2) 入 学 料 及 び 授 業 料 の 免 除

入学料の免除制度は、昭和50年度から実施されたが過去4か年の実施状況は次のとおり。

区 分 \ 年 度	50	51	52	53
出 願 者 数	30	29	16	61
全 額 免 除 者 数	10	13	9	12
半 額 免 除 者 数	8	5	2	4

授業料減免制度は昭和27年度から実施されたもので、当初の免除範囲は授業料収入予定額の5%に相当する額であった。その後4.75%となり、昭和51年度には新入学者のみ後期から6%、昭和52年度には51年度以降入学者から7%、昭和53年度からは51年度以降入学者について8%と、それぞれ免除範囲が拡大されてきた。また、新入学者については従来原則として免除できなかったが、昭和53年度から在学者同様に取扱われることになった。

## (3) ア ル バ イ ト

### 第3節 学寮・厚生福利

昭和25年当時から教務厚生部内に職業安定法第33条の2の規定に基づき、無料職業紹介所を設けて、アルバイトの斡旋をしていた。アルバイト希望者は421名49.6%で、実就業者数は1か月延人員平均300名あった。職種は軽労働が最も多く、事務、技術の順となっていた。昭和27年当時の調査によると、売血していた者もあった。また、月収の平均的なものは301円～1,000円で49%となっており、希望収入額は500円(25%)、1,000円(20.6)%であった。現在は家庭教師月収23,000円、その他の職種は時給が多く、平均して事務系400円、販売員500円程度である。なお、本学学生グループで襖張りをしているが、市価の半値の1枚800円～1,400円で、利用者の好評を受けている。このグループは、昭和27年、当時の吉川孔敏厚生課長が2～3名の学生に手ほどきしたものが大きく育ち現在に至っている。

#### (4) 学生健康保険組合

昭和29年4月設立、組合費年額500円、給付は歯科治療を除き50%（年最高限度額10,000円）弔慰金1,000円であった。また、初年度の利用率は9.7%、105件であった。組合費は昭和43年度年額1,000円に改訂され現在まで据置かれているが、給付限度額は昭和31年度に15,000円、昭和35年度には歯科治療も給付の対象となり、昭和39年度に20,000円、昭和43年度30,000円、昭和52年度からは39,000円に、また、弔慰金も昭和43年度2,000円、昭和51年12月から10,000円とそれぞれ改訂された。利用率は昭和47年度に28.1%の高率を示したが、最近の3か年は20%以下である。

#### (5) 学生教育研究災害傷害保険制度

昭和51年度から発足したこの保険制度は学生の互助共済制度として設けられた全国的規模のもので、学生の正課中における不慮の災害に対する被害者救済を目的としており、本学では入学時に全員一括加入することになっている。なお、この保険の期間は所定の修業年限内で、保険料は、文科系1,150円、医学部、工学部Bコースを除く理工系2,900円、医学部4,050円、工学部Bコース2,350円となっている。

表17-4 千葉大学公開(開放)講座の年度別講座内容

## 昭和47年度千葉大学開放講座——環境と公害——

7.19	水質汚濁の問題点 海洋汚染と生物 大気汚染の問題点	薬学部教授 腐敗研究所講師 工学部教授	山根 靖弘 清水 潮 鈴木 伸
7.20	大気汚染とぜんそく 有害物質と中毒作用 食品公害と食物連鎖	医学部教授 医学部講師 千葉大学長	吉田 亮 平野 英男 相磯 和嘉
7.21	農薬汚染の経路 残留農薬の人体汚染 環境汚染と植物被害 汚染指標としての植物の役割	薬学部助教授 医学部教授 園芸学部教授 園芸学部助教授	宮崎 元一 内田 昭夫 大野 正夫 本多 侖
7.24	生態学から見た環境計画 地質学から見た環境計画 都市の環境計画 地域開発計画 —千葉県地理的性格と環境問題—	理学部教授 教養部教授 園芸学部教授 教育学部教授	沼田 真 近藤 精造 宮崎 元夫 清水 馨八郎
7.25	許容量の概念 労働環境における許容基準 環境と微生物 —自然浄化作用—	千葉大学長 医学部教授 腐敗研究所	相磯 和嘉 石川 清文 藤原 喜久夫
7.26	公害と経済 —資本主義発展と思想の変化— 公害と法律 —私法的救済を中心として— 公害と住民運動 公害と教育	人文学部教授 人文学部助教授 教養部教授 教育学部講師	前田 新太郎 中川 良延 中野 芳彦 水内 宏

## 昭和48年度千葉大学開放講座——環境汚染と人間生活——

8.21	安全性ということ 環境汚染と自然保護	千葉大学長 理学部教授	相磯 和嘉 沼田 真
8.22	重金属汚染の問題 —水銀汚染を中心として— 鉄の文化と木の文化	薬学部教授 工学部教授	山根 靖弘 小原 二郎
8.23	経済成長と人口 食糧問題の将来像	人文学部助教授 園芸学部教授	佐々木 陽一郎 鈴木 忠和
8.28	失なわれゆくみどり 干潟の役割	園芸学部助教授 東京大学助教授 前千葉大学助教授	本多 侖 清水 潮
8.29	自然環境における人間 —人間学の視点から— 日本列島再創造 —みどりこそいのち—	人文学部教授 教育学部教授	白田 貴郎 清水 馨八郎
8.30	光化学スモッグ 大気汚染とガン	工学部教授 医学部教授	鈴木 伸 香月 秀雄
9.4	大気汚染と健康	医学部教授	吉田 亮



別 表

	難病と奇病	医学部講師	多 田 富 雄
9. 5	ある予測 —ライフ・サイエンスの視野で— くすりの功罪	腐敗研究所教授	宮 木 高 明
9. 6	公害と住民運動 あの殺虫剤の歴史 日本人の対人関係 —食と性—	医学部教授 教養部教授 腐敗研究所教授 人文学部教授	村 山 智 中 野 芳 彦 久 我 哲 郎 望 月 衛

昭和49年度 千葉大学公開講座——生活文化と技術——

8. 26	生活文化と科学技術 —過剰なるものを切り捨てるために— 法律と技術 組織と技術	千葉大学長 教育学部教授 人文学部教授	相 磯 和 嘉 土 屋 生 塩 原 勉
8. 27	情報化社会と写真技術 物理学の起源とくらし 隔測（リモートセンシング）と画像 新しい教育技術	工学部助教授 理学部教授 工学部教授 工学部教授	久 保 走 一 玉 木 英 彦 源 田 秀 三 郎 小 郷 寛
8. 28	コンピュータとくらし 生活の中のアイデア アニメーション文化 歴史と技術 —和時計から現代時計へ—	工学部助教授 工学部教授 工業短期大学部教授 工業短期大学部教授	倉 田 是 田 村 稔 大 江 茂 志 茂 主 税
8. 29	緑と生活 環境適応と医学 においと生活 くらしとデザイン	園芸学部教授 医学部教授 工学部教授 工学部教授	福 富 久 夫 朗 熊 谷 恭 一 須 賀 宏 郎
8. 30	印刷技術と生活文化 染料と生活 くらしと錠 住まいをめぐって	工学部講師 工学部教授 工学部教授 工学部教授	国 司 龍 郎 飯 田 弘 忠 波 多 野 一 郎 小 泉 正 太 郎

昭和50年度（学内事情により中止）

昭和51年度千葉大学公開講座——「くらし」と「こころ」——

7. 26	「くらしとこころ」の講座序論 —くらしのなかの自然と自然のなかのくらし— くらしの哲学 くらしとからだ	千葉大学長 教養部助教授 工学部助教授	相 磯 和 嘉 飯 田 亘 之 菊 池 安 行
7. 27	くらしととき くらしと災害 くらしと水 くらしと団地	工学部教授 教育学部教授 工学部土教授 工学部教授	志 茂 主 税 清 水 馨 八 郎 藤 代 光 雄 小 泉 正 太 郎
7. 28	くらしと色 くらしとあかり くらしと装飾 くらしと写真	工学部講師 工学部教授 工業短期大学部教授 工学部教授	湊 幸 衛 吉 江 清 森 崇 阪 口 富 弥

第17章 学 生 部

7.29	くらしと印刷	工学部助教授	川 俣 正 一
	すまいと家具	工業短期大学部教授	狩 野 雄 一
	くらしと道具	工学部講師	石 川 弘
	美とくらし	工学部教授	赤 穴 宏
7.30	工芸創作実習	工業短期大学部教授	大 江 茂
	写真のできるまで(蒔絵写真の作りかた)		
	銅版画制作(金属版画の作りかた)	工学部講師	佐 善 明
	木片を加工する(ブローチの製作)	工業短期大学部教授	成 田 寿一郎
	金属板の腐蝕(家紋の製作)	工業短期大学部助教授	高 畑 傳

昭和52年度 千葉大学公開講座「くらしと健康」

7.25	「日々々の健康」	千葉大学長	香 月 秀 雄
	開講の挨拶	医学部教授	萩 原 弥四郎
	くらしと健康について	医学部教授	村 山 智
	生活のリズム	生物活性研究所教授	山 崎 幹 夫
	かびと人間生活(かびとかび毒)	生物活性研究所教授	宮 治 誠
	かびと人間生活(かびによる病気)	生物活性研究所教授	寺 尾 清
	かびと人間生活(かびとガン)		
7.26	「母と子の健康」	前医学部教授	久 保 政 次
	こどもの健康のみかたまもりかた	医学部教授	高見沢 裕 吉
	母親の健康	医学部教授	高見沢 裕 吉
	加齢と女性(更年期とは)	看護学部教授	橋 爪 壮
	ワクチンと予防接種		
7.27	「成人の健康Ⅰ」	医学部教授	稲 垣 義 明
	循環と加齢(高血圧、狭心症、心筋梗塞)	看護学部教授	石 川 稔 生
	嗜好品と健康(酒・たばこ・コーヒー)	教育学部教授	島 崎 旺
	健康体操(実習)		
7.28	「成人の健康Ⅱ」	医学部助手	佐 藤 裕 俊
	胃がんの話	医学部講師	武 田 清 一
	乳がんの話	医学部講師	植 村 研 一
	応急対策(外傷、脳卒中、てんかん発作)	看護学部助教授	大 塚 寛 子
	人工呼吸・止血など(実習)		
7.29	「こころとからだの健康」	医学部教授	佐 藤 孝 三
	心の健康	医学部講師	来 馬 真 一
	重症心身障害児	医学部教授	井 上 駿 一
	小児と整形外科	看護学部助教授	大 塚 寛 子
	老人の家庭看護(実習)		

昭和53年度 千葉大学公開講座「くらしと文化を語る」—日本と世界—

5.27	日本の生活と芸能	人文学部教授	井 浦 芳 信
	花神の時代	人文学部教授	宇 野 俊 照
6. 3	現代のモラルと宗教	人文学部教授	白 田 貴 郎
	しつけ	人文学部助教授	青 木 孝 悦
	—性格の形成—		
6.10	大企業と国民のくらし	人文学部教授	清水川 繁 雄
	男女平等	人文学部教授	尾 吹 善 人

別 表

6.17	アメリカの風土と精神 勝海舟とヒットラー	人文学部教授	原 田 敬 一
6.24	フランス人の生活の知恵 日本社会のタテとヨコ	人文学部教授	小 島 純 一郎
7. 1	新しい性モラルの確立 核家族と離婚	人文学部教授	島 田 昌 治
7. 8	日本経済の直面する問題 物価はなぜあがる 一日本のインフレーション	人文学部教授	中 野 卓 夫
		人文学部教授	江 守 五 夫
		人文学部教授	中 川 良 延
		人文学部教授	伊 東 光 晴
		人文学部教授	小 松 憲 治